

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520462

研究課題名(和文) 古代語名詞句の意味と統語現象との関係についての記述的研究

研究課題名(英文) Descriptive study on old Japanese noun phrase from the viewpoint of meaning and syntactic phenomenon

研究代表者

高山 善行 (TAKAYAMA, Yoshiyuki)

福井大学・教育地域科学部・教授

研究者番号：90206897

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では古代語の名詞句を意味と統語現象の観点から記述した。平安時代の文学作品を資料とした。そこから古代語の名詞句の用例を抽出して分析を行い、以下の点を明らかにした。(1)名詞句「使ふ人」は、形態的緊密性において語、節との連続性をもつ。

(2)「む」を含む準体句は条件節(「未然形+ば」と連続性をもつ。その節は文脈に依存して条件文を形成する。

(3)「形容詞+こと」タイプの名詞句は受諾表現で用いられる。名詞句の運用面に注目する必要がある。

研究成果の概要(英文)：I described the noun phrase of the old Japanese from the viewpoint of meaning and syntactic phenomenon in this study. I assumed a literary work of the Heian era a document. I extracted the example of the noun phrase from there and analyzed it and clarified the following points. (1)The noun phrase tukafu-fitohas a continuousness to word, clause in the morphological interality. (2) Juntaiku including mu has a continuousness to conditional sentence that forms by mizenkei+ba. Depending on context, it organizes conditional clause. (3)The noun phrase of the type, known as adjective+koto is used by acceptance expression. It is necessary to pay attention to the operative aspect of the noun phrase.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：文法史 名詞句 古代語

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は高山善行(2002)『日本語モダリティの歴史的研究』ひつじ書房、におけるモダリティの歴史的研究を出発点とする。同書において、「モダリティと名詞句との関係」を今後の研究課題として提示した。そのために、古代語名詞句の研究を開拓していく必要が生じた。

その後、科研費による研究「平安時代における名詞句の基礎的研究」(萌芽研究2002~2004年、課題番号14651076)により、この研究を推進し、国語学会(現日本語学会)において「日本語史の将来」、また日本語文法学会において「名詞句の文法」というシンポジウムで発表、さらにはその発表内容をもとに学会誌に論文を掲載し、学界より一定の評価を得ることができた。

さらに、古代語の名詞と数との関係については、科研費による「古代語名詞の数と文法現象との関係についての実証的研究」(萌芽研究2005~2007年、課題番号17652045)において研究をおこなっている。

本研究は、その後継に位置づけられるものであり、開拓期にある名詞句研究において、今後の研究の裾野を広げるべく、多様な観点から研究の可能性を探るものである。

## 2. 研究の目的

日本語の文法研究は述語に重点が置かれ、名詞句の記述的研究が立ち後れている。これは、古典語研究においても同様である。名詞句研究を進めていかなければ、文法記述の質を高めることは望めないであろう。

古代語の名詞句の研究はほとんど手つかずであり、研究の開拓期にあるといっている。そこでまず要請されるのは、「名詞句はどのような観点から分析できるのか」という点であろう。多様な観点から分析の可能性を探っていく、今後の研究に活かすことが、研究の裾野を広げることに繋がってこよう。

本研究の開始時点では、古代語の名詞句にはほとんど光が当たっておらず、手つかずに近い状態であった。その後、日本語文法学会でシンポジウム「名詞句の文法」が企画され、さらには雑誌『日本語学』においても「名詞句の文法」という特集号が組まれた。名詞句研究は徐々にその必要性が認められつつあるが、まだ始まったばかりである。

本研究は、意味論的、統語論的観点、使用条件の観点から名詞句の分析方法について考究するものである。古代語名詞句の記述と方法論の考究は、現代語、他言語の研究に大きく貢献するものであると思われ、文法史研究の情報発信のあり方としても意義が小さくないといえる。

## 3. 研究の方法

本研究では、以下の方法によって研究を実施した。

(1)古代語の名詞句「使ひ人」を取り上げ、形態的緊密生の観点から、語(「使ひ人」「使」)節(「使はるる人」など)との連続性について記述をおこなった。

従来の研究では、「連語」として扱われるものであるが、語と節との中間的な位置づけを直感的にはなく、客観的基準を用いて明確化するところが、方法として新しいところといえる。

この方法は、言語単位における名詞句の位置づけの明確化を図るものであり、名詞句研究の基礎的部分を形成することになる。二次的には、古典文芸の作品解釈に貢献する部分もある。

(2)モダリティ形式「む」を含む準体句が「~に」「~は」という形をとる場合(「ム二節」「ム八節」と仮称)について記述し、主節の統語的、意味的特徴、使用条件について明らかにした。これらの節は、文脈依存的に条件表現をなすものであり、従来は周辺的に扱われ、まとまった記述がほとんどなされていない。

また、モダリティの研究においても、文末用法の記述に偏り、文中用法の記述が立ち後れており、やはり研究がなされていない。いわば、研究上の盲点ともいえるテーマであるといえる。

この方法は古代語の複文構造の解明に資するものであり、特に条件文の成立過程について考える上で重要なポイントとなる。また、現代語の条件表現の研究にも示唆を与えるものでもある。

(3)「形容詞+こと」タイプの名詞句として、「よきこと」「やすきこと」を取り上げ、それらが受諾表現として用いられる実態の記述をおこなった。

現代語では、依頼に対する受諾の際には、「了解しました」「わかりました」のように動詞を用いることが多いが、古典語では形容詞が使用されることがある。

この方法は、直接的には名詞句の研究(名詞句の運用面)であるが、配慮表現の歴史的研究の一部として位置づけられる。また、国立国語研究所で設計・開発されたオンラインコーパスである「日本語歴史コーパス」を活用した実践的研究でもある。

(4)話し言葉、書き言葉の観点から、名詞句の使用について考究した。近年、話し言葉と書き言葉の関係の議論が活発であり、学会シンポジウムのテーマとして扱われることもある。名詞句の研究においても、このような観点は無視するわけにはいかない。

具体的には、『源氏物語』等を資料として、平安期文芸作品における言文一致の観点か

ら観察をおこなった。この方法は、文学研究と語学研究の対話、橋渡しの実践例となるものであり、古代語の文体研究に資するものともいえる。

本研究では、以上(1)～(4)で示したように、古代語の名詞句を記述分析する多様な方法を提示した。

#### 4. 研究成果

本研究の研究成果は、「3. 研究の方法」と対応するので、以下では3.と対応させて順次記しておくことにする。

3.(1)について：福井大学言語文化学会で口頭発表をおこない、その後、愛媛大学法文学部国語国文学会で招待講演をおこなった。

さらに、国立国語研究所において、共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」(代表：近藤泰弘)の研究発表会にて口頭発表をおこなった。このプロジェクトは、オックスフォード大学(英)と共同研究でおこなっているものであり、当日は同大学の研究メンバー(代表：フレズビック教授)を含む出席者と議論をおこなった。

これらの口頭発表で教示、批判を受けた後、『愛文』47号(愛媛大学国語国文学会)にて論文として掲載された。

3.(2)について：科研・国際モダリティワークショップ(研究代表者：澤田治美)にて招待発表をおこなった。当日は、ルンド大学(スウェーデン)のラーム教授を始めとする出席者との議論をおこなった。

その後、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「複文構造の意味の研究」(代表者：益岡隆志)において招待発表をおこなった。

それらの発表を通して教示、批判を得た後に、益岡隆志他編『日本語複文構文の研究』ひつじ書房、で論文として発表した。

3.(3)について：シンポジウム「日本語の配慮表現の多様性」(於科学技術館)で口頭発表を行い、教示、批判を得た。このシンポジウムのテーマは、「配慮表現」であるが、名詞句の運用面についての発表をおこない議論した。

その成果は論文としてまとめられ、近藤泰弘他編(2014年度刊行予定)『日本語史とコーパス』ひつじ書房、にて掲載される予定である。

3.(4)について：文学研究者3名(古典文学1名、近代文学2名)と国語学研究者1名による検討を経て、兵藤裕己他(刊行予定)『文学と言語の対話』ひつじ書房、にて掲載されることになっている。

数回の検討会議を経て、2度にわたっての

討論会形式の議論は録音・文字化されている。原稿は既に入稿済みであり、現在、校正編集の段階にある。

なお、本研究の研究成果は研究成果報告書として印刷製本し、全国の研究者に順次、配布しているところである。上記の論文は研究成果報告書のなかに収められている。

研究成果報告書の書誌情報は下記の通りである。

(研究報告書書誌情報)

タイトル：「古代語名詞句の意味と統語現象との関係についての記述的研究」

課題番号22520462

研究報告書(全1冊)

A4版69頁(ソフトカバー)

2014年3月25日刊行

印刷所：エクシート

発行部数：100部

(以上、書誌情報)

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

高山善行、「古代語名詞句と語・節との関係形態的緊密性の観点から」、査読有、『愛文』47巻、愛媛大学法文学部国語国文学会、2012年、pp.1-11

〔学会発表〕(計6件)

1. 研究発表：「語と節の境界について」、福井大学言語文化学会、2010年12月

2. 招待講演：「語と節の境界をめぐって」、愛媛大学法文学部国語国文学会、2011年3月

3. 研究発表(招待)「条件表現とモダリティ表現との接点」、国立国語研究所共同研究プロジェクトワークショップ「複文構文の意味の研究」(代表：益岡隆志)、2011年12月

4. 研究発表(招待)：「古代語のモダリティをめぐって」(代表：澤田治美)モダリティワークショップ、2012年3月

5. 研究発表：「語と句・節との境界について」国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」(代表：近藤泰弘)研究発表会、2012年7月

6. 研究発表(招待)：「助動詞「む」の仮定

用法について」科研・国際モダリティワークショップ（代表者：澤田治美）、2012年8月

〔図書〕（計3件）

1. 高山善行著（単著）「条件表現とモダリティ表現の接点 「む」の仮定用法をめぐって」、益岡隆志他編『日本語複文構文の研究』ひつじ書房、2014年2月、pp.279-297

2. 高山善行著（単著）「受諾場面における形容詞使用の実態 中古語「よし」「やすし」の場合」、近藤泰弘、小木曾智信、田中牧郎編『歴史コーパスと日本語研究』ひつじ書房、刊行予定（入稿済み、現在編集中）

3. 兵藤裕己、山田俊治、安藤宏、屋名池誠、高山善行著（共著）『文学と言語の対話 徹底討論「言文一致」』ひつじ書房、刊行予定（入稿済み、現在編集中）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

該当なし

6. 研究組織  
(1) 研究代表者

高山善行（TAKAYAMA Yoshiyuki）

福井大学・教育地域科学部・教授

研究者番号：90206897

(2) 研究分担者

（ ）

研究者番号：

該当なし

(3) 連携研究者

（ ）

研究者番号：

該当なし